

共生のためのコミュニケーション手法 —ユニバーサル・ミュージアムへのいざない—

広瀬 浩二郎

1. 自分史と盲人史の往還

- ①「ユニバーサル」の源泉・理想形としての琵琶法師・瞽女の芸能
- ②コミュニケーションという観点で「障害」をとらえ直す
- ③岩波ジュニア新書『「よく見る人」と「よく聴く人」』ができるまで
- ④手話と点字、ろう文化と触文化の相違を再認識する
- ⑤「nothing about us without us」という理念の重要性
- ⑥「この子らから世に光を」＝文化人類学によって育まれる「from」の発想

2. 博物館がライフワークの舞台となる

- ①盲学校時代の自然観察で「触角」を鍛える
- ②世界中に視覚障害者の学芸員がほとんどいない理由
- ③展覧会企画を積み重ねる中で、「ユニバーサル」の真意を理解する
- ④新著『ユニバーサル・ミュージアムへのいざない』に内田樹氏との対談を収録する
- ⑤触察鑑賞の3要素“入”“流”“求”の提案
- ⑥「光／闇」「表／裏」の二項対立を乗り越えて、万人が「nature」に立ち返る

【「ユニバーサル・ミュージアム」展・監修者からのメッセージ】

「生きることが光となる」。ここでいう「光」とは可視光のみではない。人間が肉眼でとらえることができるのは、「光」の一部である。

「さわることによって光がわかる」。僕たちは身体に分布する「触角」（センサー）を駆使して、「光」にアプローチしなければならない。そのためのキーワードが「めぐる」である。物にさわると、全身をかけめぐり感動が得られる。自らの身体を動かし、手を伸ばせば、他者、そして新たな自己にめぐりあうことができる。展示会場をゆっくりめぐり、思考をめぐらす。ぐるっと体と頭がひとめぐりして、また元の場所（自分）に戻ってくる。原点に立ち返ったあなたは、きっと今まで以上に「光」輝いているだろう。

ボーダレスとは、あちらとこちらを隔てる垣根がないこと。見えるもの・見えないものを包み込む「光」が、僕たちの身体から放出される。不可視の「光」を捕捉する想像力・洞察力を磨くために、僕たちはもっと自他の内面（物語）にさわらなければならない。

「Glow Is Growing」。世界中の垣根を取っ払い、万人が「光」を共有するユニバーサル・ミュージアムの挑戦が今、ここから始まる！